

記号としての死者数

3月11日、東日本の大地震が日本を襲った。オリジンの関東支店の老朽化したビルも随分ゆれて、自分の部屋の書棚の本が殆ど飛び出て、散乱してしまった。会社の会議室のテレビに映



し出される仙台地域の津波が押し寄せる映像は、パニック映画の世界を見るようであった。福島原発の予断を許さない事態の進展と増え続ける死者、行方不明者の数には驚かされた。しかし一方で1200年ぶりの大地震、阪神大震災の4倍近い死者、行方不明者とい

う現実がなかなか切迫感を持って受け止められないでいた。想像力の欠如故か、あるいは他者に起きている事を自分の事として受け止める姿勢の欠如故か、こうした被災者の数字が単なる記号としてしか受け止めきれないでいる。こうした多くの人の死を、とても受け止めきれぬものではないかと思うが、しかし亡くなった人の現実を記号としてのみ受けとめてしまう事の危うさもまた、感じなければと思う。

日本の報道は基本的に遺体などは写さ

清野吉光氏のコラム 第30回

団塊 耕 志 録



清野 吉光(きよの よしみつ) 略歴

1950年 長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年 中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年㈱タクシーサイト創立、現取締役会長。2007年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

「温かい死」

ないと聞くし、またそれで良いとは思いますが、一方で死を含む厳しい現実も伝えきれない。体験した人としなかつた人の差、自分の目で見たと見なかつた人の差の違いは大きいと聞く。例えば映像であたかもその場面にいたかのように見る事ができたとしても、それは所詮記号の世界の枠内であることを自戒せねばならないと思う。今回の東北大地震についても実は自分は何もわかつていない、その現実も、被災した人たちの気持ちも苦痛も困難さも、実は何もわかつていないという事から出発せねばならないと思う。記号は目安にはなるが、真実そのものではない。知識人、専門家と言われる人たちが、必ずしも真実を語る訳では無い所以である。

東日本大震災のもたらした現実、そしてそれがこれからの日本にどのような影響を与えるのか？ 2・4万人もの犠牲者の死の意味は何か？現実の日常の業務と生活に追われる我々にとつて、こうした問いを抱き

続けることはなかなか難しいが、今回の福島原発問題を機に内閣参与になった田坂広志さんが、東日本大震災直後の講演の中で、この震災は後世、日本の歴史の中で日本が大きく生まれかわった結節環であり、そこで亡くなった命は新しい日本を生み出す礎となったと評価されるようになるだろう、と述べている。つまり、この東日本大震災が日本人、日本の社会の価値観を大きく変え、機械的文明観から生命的文明観に転換していく地殻変動を起し、そしてその営みは単に日本社会の変化のみならず、世界にその価値観の変革をもたらす、日本はその文明的、歴史的、また自然環境(厳しさも含め)の先進性故にその変革の牽引車たる役割を持つだろうとの事。自然を征服の対象と捉える西洋的自然観と、人間そのものを自然の一部と捉え、それとの共生を考える東洋的(日本的)自然観。死を生(の延長として捉え、諸行無常観の中で、人間の有限性を受け入れようとする日本の死

生観。こうした日本の歴史と自然の中で培われてきたDNAが、諸外国の人が感嘆する危機に際しての日本人の冷静さや秩序立った動きの背景をなすもののように思える。現在の東日本大震災からの復興、福島原発問題を契機にした新しいエネルギーと社会の在り方を、この日本の世界的な使命の中で位置付けたいものである。それでこそ尊い犠牲者の皆さんも浮かばれるのではないかと思う。

「温かい死」と「冷たい死」

5月14日「地域と交通をサポートするネットワーク in Kyushu」(通称Qサポネット)という福岡市内で行われた集まりに参加した。すでにこの会合に参加するの4回目で、大分大学の井先生(大井先生)の提唱で2010年7月にスタートした。その設立趣意書には「交通に関連する地域課題を解決していくためには、行政スタッフ、交通事業者、コンサルタント、研究者

住民団体、商業・医療・介護等の地域関係者が、お互いの「知恵」を、立場を超えて「横串」でつないでいくネットワークづくりが必要」とあり、さらに「長期的には地域公共交通のコーディネート人材育成、観光・まちづくり・介護・生活支援・地球温暖化対策等、異なる政策や事業連携による新しいビジネスモデル形成の促進も目指していきたい」とある。まさにタクシー産業が地域における「総合生活移動産業」として確立していくことを願望する自分としては、願ってもない学習の場であり、ネットワークの場である。先日の会合ではまず、福岡市近郊の大野城市市民部コミュニティ担当部長の見城氏から特別講演があり、その問題提起を基に議論をし、最後に発表するという密度の濃い交流会であり、活発で刺激的な議論が行われた。そして毎回自由参加で懇親会が行われるが、今回は40人と盛況で、時代のニーズにあった集まりであることを直感させるものであった。

たまたまその懇親会の時、隣に居合わせた方が熊本の大手病院の内科部長のお医者さんで、非常に興味深いお話を聞いた。そもそもお医者さんがこのQサポネットの集まりに参加すること自体が奇異に感じたが、やはり医療と交通とは深い関係があり、医者としても良い医療をするためには患者さんのための良い移動手段を確保する事は、大いなる関心事との事。新しい医療像、お医者さん像を感じる。そしてそのお医者さんのある言葉に非常に強い印象を受けた。その方は職業上多くの患者さんの「死」を看取り、そして死亡診断書を書いてきた。人間の世界中で「絶対」と言えるものは、人間は誰でも必ず死ぬという事だ。しかしその多くの看取ってきた死の中には「温かい死」と「冷たい死」がある。命の鼓動が止まるという点では同じでも、その「死」がその人が生きて来た「生の結果」であり、どのような人間の関係を作り上げて来たかが、その「死」を取り巻く関係に現れると

言う。「温かな死」と「冷たい死」、それはある意味「温かな生」を生きて来た人と「冷たい生」を生きて来た人の結果であり「死」という点では平等だが、しかし人々の心の中に残るものは違う。思わずこの話を聞いてあの山田太一の「異人たちとの夏」の世界を思いだしてしまった。人間に絶対的に訪れる「死」は、しかし人の消滅では無い。人々の心の中にその人は必ず残る。単なる幻想なのかも知れないが、しかし人々の心の中に残るといふ事は、ある意味存在している事と同様の価値を持つ。死者を弔い、先祖を供養する意味がわかる気がする。そしていつ何どき訪れるかも知れない自らの死を「温かい死」として受け止めて貰えるよう、「温かい生」を生きねばならないと改めて感じた。

(2011年5月20日記)



プリンター一体型業務用アルコール測定器

ALC-miniⅢ

¥83,000より

アルコールだけに反応 音声ガイドで簡単操作

コンパクトなボディにプリンタ機能搭載！
吹き込む・測定する・記録する、の
カンタン3ステップアルコール測定！

※表示金額には消費税、保守料等は含まれておりません。

株式会社 システムオリジン Tel.03-3834-8352

お申し込み お問い合わせ

関東支店営業本部 〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-3-4 田中ビル7F 拠点/北海道・東北・関東・甲信越・東海・名古屋・関西・中国・九州

2011～2012年にかけて、全ての事業者はアルコール測定器の使用が義務付けられます。(事業用自動車総合安全プラン2009)

義務化に向けて 備えの1台です！

製造元 TD 東海電子株式会社 <http://www.tokai-denshi.co.jp>